

エイズキャンペーンの効果に関するフィールド研究

木村堅一

(名桜大学)

深田博己

(広島文教女子大学)

本研究の目的は、エイズキャンペーンへの参加が、参加者のエイズに関する意識改善にどのような効果を生じさせたかを検討することであった。大学生 92 名をエイズキャンペーン参加群 65 名と不参加群 27 名に配置し、キャンペーンの前後でエイズに関する意識を同じ質問紙によって測定した。その結果、36 変数中 5 変数で変化が認められた。キャンペーン参加群は不参加群よりも、コンドーム使用の規範認知が増加し、HIV 感染者・エイズ患者(PWH/A)との共生行動のコスト認知が減少した。また、PWH/A との共生行動の報酬認知が増加し、PWH/A との共生行動意思が強まった。本研究で取り上げたエイズキャンペーンは、HIV 感染予防に対しては目立った効果を生じさせないが、PWH/A との共生に対しては特定の効果を持つことが証明された。

キーワード：エイズ教育、予防、共生、フィールド研究

問 題

これまでに実施してきたエイズ教育に関する研究

エイズ教育は、HIV (human immunodeficiency syndrome) 感染予防教育と PWH/A (person with HIV/AIDS: HIV 感染者とエイズ患者の総称) との共生教育という 2 つの教育領域をもつ(村瀬, 1994)。エイズ教育に関する研究動向を整理すると、HIV 感染予防教育に関する研究は、教育的介入の効果を測定する介入研究と最終変数である効果の規定因を探る調査研究に分類され、PWH/A との共生教育も同様な 2 タイプの研究に分類される(高本・深田, 2008)。

HIV 感染予防を問題とした場合は、説得における脅威アピール研究の枠組みが有効である。例えば、Freimuth, Hammond, Edgar, & Monahan (1990) はエイズ予防に関する 127 の TV 公共広告の内容分析を行い、約 26% が脅威アピールを用いていたことを明らかにした。Devos-Comby & Salovey (2002) は、地域コミュニティで実施される HIV/エイズ予防運動や専門的介入において、説得的コミュニケーション、特に脅威アピール研究の重要性を指摘している(e.g., Salovey, Rothman, & Rodin, 1998)。実際に、HIV 感染予防を説得の話題とした脅威アピールを行ったところ、その効果が確認されてきた(e.g., 木村, 2002; Sherman, Nelson, & Steele, 2000)。

一方で、HIV への対処だけでなく、最終変数として HIV への対処と PWH/A との共生を同時に取り上げた高本・深田(2008)は、①3 種類のエイズ情報(基礎情報、感染予防情報、共生情報)が 3 種類のエイズ知識(基礎知識、感染予防知識、共生知識)に影響し、②これらの知識が 3 種類の認

知と感情（深刻さ認知、生起確率認知、恐怖感情）を通して、③3 種類の HIV 対処行動意思（コンドーム使用行動意思、不特定性関係抑制行動意思、HIV 抗体検査受検行動意思）と 2 種類の PWH/A に対する共生態度（PWH/A への態度、PWH/A への偏見）を規定するであろう、という 4 段階モデルを提案し、検証した。その結果、モデルの適合度は高かったが、最終変数に対するモデルの説明力（決定係数： R^2 ）は、PWH/A への偏見に対して 22%であったほかは全て 10%以下と小さいことが示された。また、知識は HIV 対処行動意思に対して直接影響を与え、認知と感情は PWH/A に対する共生態度に影響することが判明し、HIV 対処行動意思に対する影響要因および影響過程と、PWH/A との共生行動意思に対する影響要因および影響過程は、異なるのではないかと示唆された。

この高本・深田（2008）の示唆を受けて、HIV 対処行動意思の規定因とその影響過程に焦点化した高本（2006）は、①3 種類の情報（基礎情報、感染予防情報、共生情報）と性別が防護動機理論（Rogers, 1983）の仮定する 6 種類の認知（深刻さ認知、生起確率認知、効果性認知、自己効力認知、報酬認知、コスト認知）あるいは集合的防護動機モデル（深田・戸塚, 2001; 戸塚, 2002）の仮定する 8 種類の認知（深刻さ認知、生起確率認知、効果性認知、コスト認知、実行能力認知、責任認知、実行者割合認知、規範認知）に影響し、②これらの認知が 3 種類の対処行動意思（コンドーム使用行動意思、不特定性関係抑制行動意思、HIV 抗体検査受検行動意思）を規定するであろう、という 3 段階モデルを提案し、検証した。その結果、第 2 段階で防護動機理論の仮定する 6 種類の認知を使用する場合（ $R^2=.09\sim.25$ ）に比べ、集合的防護動機モデルの仮定する 8 種類の認知を使用する場合（ $R^2=.42\sim.53$ ）の方が最終変数に対するモデルの説明力は高いと指摘された。

しかし、高本（2006）のモデルにおける最終変数を HIV 感染に対する不適応的対処反応に置き換えた高本・深田（2006）は、防護動機理論と集合的防護動機モデルの説明力が非常に低い（ $R^2<.10$ ）と報告している。

引き続き高本・深田（2010b）は、高本（2006）の 3 段階モデルの第 1 段階（情報）と第 2 段階（認知）の間に新たに 3 種類の知識（基礎知識、感染予防知識、共生知識）を導入し、4 段階モデルを提案し、検証した。このモデルは、①3 種類の情報と性別、②3 種類の知識、③6 種類の認知あるいは 8 種類の認知、④3 種類の HIV 対処行動意思、という 4 段階の影響過程であった。分析の結果、モデルの高い適合度が得られ、第 3 段階で防護動機理論の仮定する 6 種類の認知を使用する場合（ $R^2=.21\sim.46$ ）に比べ、集合的防護動機モデルの仮定する 8 種類の認知を使用する場合（ $R^2=.48\sim.66$ ）の方が最終変数に対するモデルの説明力は高いと指摘された。高本（2006）の 3 段階モデルに知識を導入して 4 段階モデルに修正した結果、最終変数に対するモデルの説明力は明らかに増加していることが分かる。

他方、高本・深田（2008）の示唆を受けて、PWH/A との共生行動意思の規定因とその影響過程に焦点化した高本・深田（2010a）は、①3 種類の情報と性別、②3 種類の知識、③新たに作成した 6 種類の認知（深刻さ認知、生起確率認知、責任認知、コスト認知、報酬認知、実行能力認知）と 2 種類の感情（恐怖感情、共感感情）、④PWH/A との共生行動意思、という 4 段階の共生行動生起過程モデルを提案した。分析経過から、第 3 段階の 2 種類の感情が第 2 段階に位置づけを変更された。その結果、修正された共生行動生起過程モデルは高い適合度を示し、共生行動意思に対するモデル

の説明力 ($R^2=.51$) も高いことが証明された。

以上の研究は、いずれも調査的な方法を用いて、HIV 対処行動意思あるいは PWH/A との共生行動意志の規定因とその影響過程を解明しようとするものであった。これに対して、実験的な方法を用いて、エイズ教育用教材の効果を検討した研究が存在する。実験用に作成した恐怖－脅威アピール説得のための情報効果を検討した実験的研究（木村, 1995, 1999a; 木村・深田, 1995）、既成のビデオ教材の効果を検討した実験的研究（深田・木村, 2000; 木村, 1999b, 2000）、既成の印刷教材の効果を検討した実験的研究（深田・高本・深田, 2007a, 2007b）がある。これらの研究は、実験室あるいは講義室で、実験参加者にエイズ教育用教材を提示し、その効果を実験群における事前－事後測定計画（木村, 1999b, 2000）に基づいて、あるいは統制群法（深田・木村, 2000; 深田他, 2007a, 2007b; 木村, 1995; 木村・深田, 1995）に基づいて判定する方法を採っている。

本研究で検証するエイズキャンペーン

現実のエイズ教育は、学校や地域社会において様々な形態をとって実施されているが、このように全国各地で実施されている多様なエイズ教育が参加者に対して実際にどの程度の教育効果を生じさせるのか、ひとつずつ検証し、より効果的なエイズ教育の実現を目指す必要がある。本研究は、NPO 法人 HIV 人権ネットワーク沖縄エイズキャンペーン実行委員会主催の「エイズキャンペーン 2006 人権フォーラム ～君がそこに生きているだけで～」への参加が、参加者のエイズに関する意識改善にどのような効果を生じさせたかについて検討することを目的とする。

研究対象とするエイズキャンペーンは、2006 年 12 月 22 日（金）18 時から 20 時 35 分過ぎまでに亘って沖縄県名護市民会館で実施された。同キャンペーンは、HIV 人権ネットワーク沖縄エイズキャンペーン実行委員会の主催により、国立療養所沖縄愛楽園自治会、名護市教育委員会、ISSE（サティア・サイ教育協会）の 3 団体の共催の形式をとって、沖縄県、沖縄県教育委員会、沖縄県 PTA 連合会、沖縄タイムス、琉球新報、琉球放送、沖縄テレビ、琉球朝日放送の 8 団体の後援と、（株）沖縄電力、ニッポンレンタカー沖縄（株）、沖縄ツーリスト（株）の 3 社の協賛を得て実施された。

主催団体の「NPO 法人 HIV 人権ネットワーク沖縄」は、1993 年に琉球大学教育学部平良一彦教授の呼びかけで、（財）公衆衛生協会に発足したエイズ対策委員会がルーツであり、2005 年度より正式に NPO 法人として活動を始めた団体である。平良一彦氏を会長とし、那覇市に本部を置き、多くのボランティアがさまざまな活動を継続してきている。

「NPO 法人 HIV 人権ネットワーク沖縄」の主な活動内容は、①沖縄県から委託を受けた夜間電話相談（月曜日から金曜日の 20 時から 22 時まで実施：電話番号 0120 - 812 - 874）、②ホームページによる意見交換や相談（<http://www.hiv-net.com>）、③キャンペーンの開催、学校・父母へのエイズ教育支援活動、④マスコミ各機関と提携して、啓発広告 CM 報道、定期的なキャンペーンの実施、⑤その他必要に応じた活動、である。

「エイズキャンペーン 2006 人権フォーラム ～君がそこに生きているだけで～」のプログラムは次のとおりである。①18:00 開場（受付開始）、②18:27 開演『希望の詩』上映、③18:30 オープニングソング：那覇市出身歌手、④18:40 パネルディスカッション（進行：HIV 人権ネッ

トワーク沖縄代表理事、パネラー：HIV 感染者 2 名、北部保健所医師 1 名、HIV 人権ネットワーク沖縄事務局長 1 名)、⑤19:25 メッセージソング：元ハンセン病の歌手、⑥19:40 劇「いつでも虹をみたいなら」：中学生・高校生・専門学校生・大学生有志、⑦20:30 大合唱「未来」フィナーレ、⑧20:35 終了。

本研究の目的

先に述べたように、本研究の目的は、NPO 法人 HIV 人権ネットワーク沖縄エイズキャンペーン実行委員会主催の「エイズキャンペーン 2006 人権フォーラム ～君がそこに生きているだけで～」への参加が、参加者のエイズに関する意識改善にどのような効果を生じさせたかを検討することである。

本研究では、参加者に対するエイズキャンペーンの効果をより厳密に検討するために、統制群法と事前－事後測定法の手続きを併用する。そのために、沖縄県内の大学で、当該エイズキャンペーンへの参加者を募り、参加者を実験群、不参加者を統制群とする手続きをとることによって、ほぼ等質な実験群と統制群を用意する。厳密には、エイズキャンペーンへ参加する実験群と参加しない統制群の事前測定値を比較することによって、両群が等質であることを確認する必要がある。そして、実験群と統制群の両方におけるエイズに関する意識を、エイズキャンペーンの前後で測定する事前－事後測定法を採用する。この測定法により、エイズキャンペーンへの参加によって生じる実験群におけるエイズに関する意識の変化量を、統制群における 2 回の測定時点間で生じるエイズに関する意識の変化量を比較基準にとることで、厳密に分析することが可能となる。

方 法

実験計画と実験参加者

独立変数は、測定時期（事前－事後）×キャンペーンへの参加（参加、不参加）の 2 要因混合計画であった（測定時期は実験参加者内変数、キャンペーンへの参加は実験参加者間変数）。事前と事後ともに測定できた実験参加者数は、キャンペーン参加群 65 名（男性 34 名、女性 30 名、不明 1 名）、キャンペーン不参加群 27 名（男性 16 名、女性 11 名）であった。実験参加者は、すべて沖縄県在住の私立大学生であった。

実験手続き

実験は「若者とエイズに関するアンケート調査」と題し、2006 年の 12 月から 2007 年 1 月に実施した。2006 年 12 月 15 日、心理学関係の授業中に授業担当教員が事前測定を行い、その場でエイズキャンペーンへの参加を募った。参加希望者は 2006 年 12 月 22 日に催されたエイズキャンペーンに参加し、2007 年 1 月 12 日に、参加群として、事後測定項目に回答した。エイズキャンペーン不参加の実験参加者は、不参加群として、同日に事後測定項目へ回答した。なお、質問票の最後では、事前測定データと事後測定データのマッチングのために、携帯電話（または自宅の電話）の番号の

下2桁と、誕生日の日いち2桁を記入するよう求め、実験参加者それぞれのIDコードを作成した。

従属変数

事前測定および事後測定の両方で以下の項目について測定した。また、事前測定のみにおいて、PWH/Aに直接会った経験の有無、身近な人物にPWH/Aがいた経験の有無、性経験の有無（「差し支えなければお答え下さい。答えたくない方は無回答で構いません」と但し書きを添えた）を尋ねた。事後測定では、エイズキャンペーンに参加したか否かを回答させた。

なお、質問項目の配列順序は以下のとおりであった。

エイズに対する恐怖感情 “エイズという病気を思い浮かべたときに、「怖い」、「恐ろしい」という感情を”の1項目に対して、「まったく感じない（1点）」から「非常に感じる（4点）」の4段階で回答を求めた。

エイズに対する恥感情 “エイズの問題で誰かと話すときに、「照れ」、「恥ずかしい」という感情を”の1項目に対して、「まったく感じない（1点）」から「非常に感じる（4点）」の4段階で回答を求めた。

PWH/Aへの共感感情 “「エイズウィルス感染者やエイズ患者の苦しみを考えると、とてもつらい」や「エイズウィルス感染者やエイズ患者の気持ちがわかる」といった共感的な感情を”の1項目に対して、「まったく感じない（1点）」から「非常に感じる（4点）」の4段階で回答を求めた。

HIV感染の深刻さ認知（社会的被害／身体的被害） 社会的被害については“エイズウィルスに感染したことが知れた場合、友人や恋人を失うことがある”の1項目、身体的被害については“エイズウィルスに感染した場合、身体的健康が失われて病弱になり、快適な生活を送れない”の1項目に対して、「まったくそう思わない（1点）」から「非常にそう思う（4点）」の4段階で回答を求めた。

HIV感染の生起確率認知（日本での感染拡大／自分自身への感染可能性） 日本での感染拡大については“日本にも、エイズウィルス感染者やエイズ患者は非常に多くいる”の1項目、自分自身への感染可能性については“運が悪ければ、将来、自分自身がエイズウィルスに感染する可能性もある”の1項目に対して、「まったくそう思わない（1点）」から「非常にそう思う（4点）」の4段階で回答を求めた。

PWH/Aに対する態度 ①“現実的に考えて第三者である私は、エイズウィルス感染者やエイズ患者に対して何もしてあげられないと思う”（逆転項目）、②“私はエイズウィルス感染者やエイズ患者を支えていく立場でありたいと思う”、③“エイズウィルス感染者やエイズ患者に同情はするが、自分から何かしてあげようとは思わない”（逆転項目）、④“エイズウィルス感染者やエイズ患者に対して偏見をもったり、差別したりするのはよくないことだ”の4項目に対して、「まったくそう思わない（1点）」～「非常にそう思う（4点）」の4段階で回答を求めた。

コンドーム使用に関する項目 “エイズウィルスへの感染を予防するために、「セックスの際にコンドームを使用する（使用してもらう）」ことについて、あなたはどのように思いますか”という問いかけの後に、以下の8つの変数について、「まったくそう思わない（1点）」から「非常にそう思う（4

点)」の4段階で回答を求めた。

反応効果性認知は「この方法は、エイズウィルスへの感染を防ぐのに効果的だ」、反応コスト認知は「この方法は、実行に伴ういろいろな負担が大きい」、自己効力認知あるいは実行能力認知は「この方法は、実行するのが難しい」(逆転項目)、コンドーム不使用の報酬認知は「この方法を実行しないほうが得るものは大きい」(本研究で追加した独自の項目)、実行者割合認知は「この方法は、多くの人が実行している」、責任認知は「この方法を実行する責任がある」、規範認知は「この方法を実行することを周囲の人たちが期待している」、行動意思は「この方法を実行するつもりがある」の各1項目であった。

HIV 抗体検査受検に関する項目 “エイズウィルスへの感染を早期発見するために、「エイズ検査を受ける」ことについて、あなたはどのように思いますか”という問いかけの後に、以下の8つの変数について、「まったくそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(4点)」の4段階で回答を求めた。

反応効果性認知は「この方法は、エイズウィルスへの感染を防ぐのに効果的だ」、反応コスト認知は「この方法は、実行に伴ういろいろな負担が大きい」、自己効力認知あるいは実行能力認知は「この方法は、実行するのが難しい」(逆転項目)、HIV 抗体検査非受検の報酬認知は「この方法を実行しないほうが得るものは大きい」(本研究で追加した独自の項目)、実行者割合認知は「この方法は、多くの人が実行している」、責任認知は「この方法を実行する責任がある」、規範認知は「この方法を実行することを周囲の人たちが期待している」、行動意思は「この方法を実行するつもりがある」の各1項目であった。

PWH/A との共生行動に関する項目 “学校や職場や近所など、身近にエイズウィルス感染者やエイズ患者がいる場合、その人が困っていれば、進んで援助することについて、あなたはどのように思いますか”という問いかけの後に、以下の5つの変数(各1項目)について、「まったくそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(4点)」の4段階で回答を求めた。

責任認知は「自分には、この行動を実行する責任がある」、コスト認知は「この行動は、自分にとって、実行に伴う負担が大きい」、報酬認知は「この行動を実行することによって、自分は多くのものを得ることができる」、実行能力認知は「自分には、この行動を実行するのが難しい」(逆転項目)、行動意思は「自分はこの行動を実行するつもりがある」の各1項目であった。

エイズ問題への関心 “あなたはエイズ問題についてどの程度関心がありますか”の1項目について、「まったく関心がない(1点)」から「非常に関心がある(4点)」の4段階で回答を求めた。

健康問題への関心 “あなたは自分の健康についてどの程度関心がありますか”の1項目について、「まったく関心がない(1点)」から「非常に関心がある(4点)」の4段階で回答を求めた。

学習意欲 “あなたは学校の授業やキャンペーンを通して、いろいろなことを学ぶことについてどの程度関心がありますか”の1項目について、「まったく関心がない(1点)」から「非常に関心がある(4点)」の4段階で回答を求めた。

大学での成績に対するこだわり “あなたは学校の授業でよい成績をとることにどの程度関心がありますか”の1項目について、「まったく関心がない(1点)」から「非常に関心がある(4点)」

の4段階で回答を求めた。

フェイス項目 実験参加者の性別と年齢を尋ねた。

エイズキャンペーンの内容

エイズキャンペーンのプログラムの概要は問題で述べた通りであった。以下に、各プログラムの詳細について述べる。プログラムの進行順序は、以下の見出し番号の通りであった。

(1) 『希望の詩』上映 開演後、まず初めに上映された『希望の詩』とは、1年前の2005年12月22日に開催されたエイズキャンペーンにおいて、高校生と大学生の有志によって上演された劇を撮影したビデオであった。

(2) オープニングソング 今回のキャンペーンのオープニングソングとして、沖縄県を中心に活動している那覇市出身の歌手 Siori さんによる歌の上演が行われた。

(3) パネルディスカッション 進行は HIV 人権ネットワーク沖縄代表理事、パネラーは HIV 感染者2名、北部保健所医師1名、HIV 人権ネットワーク沖縄事務局長1名の5名によるパネルディスカッションが行われた。

その内容は、まず初めに、医師により、①沖縄県在住の PWH/A の人数 (95 名)、②HIV の感染経路 (セックス以外の日常生活では感染しないこと)、③HIV は母子感染することもあるが、あくまで遺伝ではなく感染症であること、④発病をしていなくても他者に感染すること、⑤高校生を対象としたアンケート調査の結果、「関心がある」と答えた人は6割にしか満たないことがスライドを用いて紹介された。

そして、ここまでの説明を受けて、2名の感染者によって、以下の内容が語られた。⑥誰にでも感染の危険性があること (感染者 A 氏: 誠実で真面目な彼氏とのセックスで感染したこと、自分自身が HIV に感染するなんて考えたこともなかったこと / 感染者 B 氏: 不特定多数の相手と性交渉をもっていたわけではなく、たった一人の特定の相手とのセックスによって感染したこと、そのパートナーも感染の事実を知らず、自分と性感染症とは無関係だと思い込んでいたこと)、⑧早期発見・早期治療の大切さ (感染者 A 氏: 感染して半年以内に検査を受けた人は予後が良いこと / 感染者 B 氏: 自分は感染して8年以上経ってから判明したため、治療が非常に困難であること、薬による副作用の辛さ)。

さらに医師によって、⑨HIV 感染の予防方法について (No Sex、Safer Sex)、⑩HIV 抗体検査について (無料で即日検査が可能であること)、⑪他人事意識から生まれるもの (知識があっても予防方法を実行しない、無防備なセックスをしても気にならない感覚、PWH/A に対する偏見や差別) について説明がなされた。そしてそれを受けて、感染者 B 氏が実際に経験した偏見や差別の実態が語られた (HIV に感染していることが家族に知れたとき、先入観から、性的に奔放な行動をとっていたと思われて縁を切られたこと)。さらに人権ネットワーク沖縄事務局長によって、ハンセン病患者への差別の歴史 (感染力はほぼない病気であるにもかかわらず、療養所に閉じ込められ、数々の差別を受けてきたこと) が語られた。そして、⑫PWH/A が必要としている援助 (“HIV 感染を知る前” と何も変わらない姿勢) についての話の後で、⑬家族が PWH/A を理解するためには、社会全体が

PWH/A を理解する必要があることが語られた。

(4) **メッセージソング** 元ハンセン病患者で沖縄県出身の歌手、宮里新一さんによるメッセージソングが2曲披露された。

(5) **劇『いつでも虹をみたいなら』上演** 中学生、高校生、専門学校生、大学生有志による劇『いつでも虹をみたいなら』が上演された。この劇は、エイズに対する誤った認識から、仲間に見られ差別を受けるマドカと心司、同性愛者であることが原因でクラスメートからいじめられて引きこもる顕、そして彼らを取り巻く家族や友人、教師やクラスメートの姿を描いた作品であった。劇中では、同性愛者である顕自身の苦しみだけでなく、その弟が抱える悩み、HIV感染者のマドカを親友にもつマナの抱える葛藤なども描かれ、エイズという病気の恐ろしさよりも、偏見や差別の恐ろしさに重点をおいた内容であった。また劇中では、元ハンセン病患者である老女も登場し、差別を受けてきた彼女の口から「違う色でありながらひとつに輝く虹」の話が語られた。これは「人と違っていいんだ」というメッセージと「自分と異なるものを受け入れる勇気をもとう」というメッセージが込められた内容であった。

(6) **大合唱『未来』** 最後に沖縄県出身のアーティスト Kiroro の「未来」を参加者全員で合唱し、キャンペーンの全プログラムは終了した。

結 果

測定変数（質問項目）の構造

測定変数（質問項目）の構造は、次の通りであった。下の見出し番号の①～⑨は、分析結果の見出し番号①～⑨に対応する。

①**防護動機理論、集合的防護動機モデル、共生行動生起過程モデルに共通の変数** HIV感染の深刻さ認知2変数（社会的被害認知、身体的被害認知）、HIV感染の生起確率認知2変数（日本での感染拡大認知、自分自身への感染可能性認知）。

②**防護動機理論と集合的防護動機モデルに共通のコンドーム関連変数** コンドーム使用の効果性認知、コンドーム使用のコスト認知、コンドーム使用の自己効力認知あるいは実行能力認知、コンドーム使用行動意思。

③**防護動機理論と集合的防護動機モデルに共通のHIV抗体検査関連変数** HIV抗体検査受検の効果性認知、HIV抗体検査受検のコスト認知、HIV抗体検査受検の自己効力認知あるいは実行能力認知、HIV抗体検査受検行動意思。

④**防護動機理論に固有のコンドーム関連変数** コンドーム不使用の報酬認知。

⑤**防護動機理論に固有のHIV抗体検査関連変数** HIV抗体検査非受検の報酬認知。

⑥**集合的防護動機モデルに固有のコンドーム関連変数** コンドーム使用の実行者割合認知、コンドーム使用の責任認知、コンドーム使用の規範認知。

⑦**集合的防護動機モデルに固有のHIV抗体検査関連変数** HIV抗体検査受検の実行者割合認知、HIV抗体検査受検の責任認知、HIV抗体検査受検の規範認知。

⑧**共生行動生起過程モデルに固有の変数** エイズに対する恐怖感情、PWH/A に対する共感感情、共生行動実行の責任認知、共生行動実行のコスト認知、共生行動実行の報酬認知、共生行動の実行能力認知、共生行動意思、PWH/A に対する態度 4 変数。

⑨**その他** エイズ問題への関心、健康問題への関心、学習意欲、成績に対するこだわり。

実験群と統制群の等質性の検討

実験群（参加群）と統制群（不参加群）が等質であったかどうかを検討するために、両群の事前

Table 1 条件間の等質性の確認：事前測定における各変数の得点の群間比較（*t* 検定）

	参加群（ <i>n</i> =65）		不参加群（ <i>n</i> =27）		<i>t</i> 検定		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値	<i>df</i>	
エイズに対する恐怖感情	3.20	0.81	3.41	0.84	-1.10	90	
エイズに対する恥感情	1.54	0.69	1.59	0.64	-0.35	90	
PWH/Aへの共感感情	2.83	0.74	2.85	0.78	-0.09	89	
深刻さ認知（社会的被害）	2.91	0.79	2.85	0.82	0.31	90	
深刻さ認知（身体的被害）	2.52	0.79	2.93	0.68	-2.47	56.74	*
生起確率認知（日本）	3.51	0.64	3.35	0.63	1.09	89	
生起確率認知（自分自身）	2.86	0.90	2.48	0.89	1.85	90	†
PWH/Aに対する態度①	2.74	0.83	2.59	0.69	0.80	90	
PWH/Aに対する態度②	2.88	0.80	2.81	0.62	0.36	90	
PWH/Aに対する態度③	3.08	0.78	2.78	0.58	1.80	90	†
PWH/Aに対する態度④	3.85	0.36	3.81	0.40	0.37	90	
コンドーム効果性認知	3.71	0.46	3.48	0.80	1.37	33.28	
コンドームコスト認知	1.52	0.85	1.67	0.78	-0.75	90	
コンドーム自己効力（実行能力）認知	3.86	0.35	3.62	0.75	1.60	29.38	
コンドーム報酬認知	1.25	0.59	1.48	0.70	-1.54	41.96	
コンドーム実行者割合認知	3.09	0.74	2.93	0.87	0.93	90	
コンドーム責任認知	3.86	0.46	3.52	0.70	2.34	35.85	*
コンドーム規範認知	3.23	0.86	3.33	0.68	-0.55	90	
コンドーム行動意思	3.89	0.31	3.56	0.64	2.61	31.27	*
検査効果性認知	3.95	0.21	3.70	0.61	2.08	28.64	*
検査コスト認知	1.83	0.81	1.93	1.00	-0.49	89	
検査自己効力（実行能力）認知	3.23	0.79	3.04	0.90	1.03	90	
検査報酬認知	1.48	0.79	1.67	0.73	-1.07	90	
検査実行者割合認知	2.09	0.65	1.67	0.55	2.96	90	**
検査責任認知	2.95	0.89	2.96	0.85	-0.05	90	
検査規範認知	2.68	0.92	2.41	0.69	1.53	64.00	
検査行動意思	2.95	0.87	2.59	0.75	1.88	90	†
共生行動責任認知	3.08	0.59	3.11	0.64	-0.25	90	
共生行動コスト認知	2.05	0.65	1.85	0.72	1.27	90	
共生行動報酬認知	3.12	0.67	3.37	0.49	-1.72	90	†
共生行動実行能力認知	2.94	0.75	3.11	0.51	-1.28	70.80	
共生行動意思	3.00	0.64	2.96	0.71	0.25	90	
エイズ問題関心	3.14	0.56	3.00	0.48	1.13	90	
健康問題関心	3.57	0.59	3.67	0.55	-0.74	90	
学習意欲	3.40	0.58	3.19	0.74	1.49	90	
成績に対するこだわり	3.08	0.74	3.19	0.62	-0.67	90	

注1 ****p* < .01 ***p* < .01 **p* < .05 †*p* < .10

測定における 36 変数の平均と標準偏差を算出し、 t 検定によって実験群と統制群の間の有意差検定を行った結果を併せて Table 1 に示した。表内の変数の配列順序は、質問紙における測定順である。

①防護動機理論、集会的防護動機モデル、共生行動生起過程モデルに共通の変数 HIV 感染の深刻さ認知のうちの身体的被害認知は、実験群よりも統制群の方が有意に高かった。エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、HIV 感染の身体的被害に関する深刻さ認知が低いことが分かった。そのほかの 3 変数に関しては、実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

②防護動機理論と集会的防護動機モデルに共通のコンドーム関連変数 コンドーム使用行動意思は、統制群よりも実験群の方が有意に高かった。エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、コンドーム使用行動意思が高いことが分かった。そのほかの 3 変数に関しては、実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

③防護動機理論と集会的防護動機モデルに共通の HIV 抗体検査関連変数 HIV 抗体検査受検の効果性認知は、統制群よりも実験群の方が有意に高かった。エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、HIV 抗体検査受検の効果性認知が高いことが分かった。そのほかの 3 変数に関しては、実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

④防護動機理論に固有のコンドーム関連変数 実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

⑤防護動機理論に固有の HIV 抗体検査関連変数 実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

⑥集会的防護動機モデルに固有のコンドーム関連変数 コンドーム使用の責任認知は、統制群よりも実験群の方が有意に高かった。エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、コンドーム使用の責任認知が高いことが分かった。そのほかの 2 変数に関しては、実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

⑦集会的防護動機モデルに固有の HIV 抗体検査関連変数 HIV 抗体検査受検の実行者割合認知は、統制群よりも実験群の方が有意に高かった。エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、HIV 抗体検査受検の実行者割合認知が高いことが分かった。そのほかの 2 変数に関しては、実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

⑧共生行動生起過程モデルに固有の変数 11 変数に関して、実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

⑨その他 3 変数に関して、実験群と統制群の間に有意差は見られなかった。

まとめ 以上のように、実験群の事前測定値と統制群の事前測定値の間に有意差が見られた変数は、36 変数中 5 変数であった。エイズキャンペーンに参加した実験群は、不参加の統制群に比べ、HIV 感染の身体的被害に関する深刻さ認知が低い、コンドーム使用の責任認知が高く、コンドーム使用行動意思が高いという特徴をもつことが示され、また、HIV 抗体検査受検の効果性認知が高く、HIV 抗体検査受検の実行者割合認知が高いという特徴を持つことも示された。約 14% の変数に関して、実験群と統制群の間に有意差が見られたため、本研究で用意した実験群と統制群は、大きく異なる集団ではないものの、完全に等質であったとは言いがたい。

エイズキャンペーンの効果

実験群と統制群の等質性に若干問題が残るため、エイズキャンペーンの効果进行分析する方法として、実験群における事後測定値から事前測定値を差引いた値を実験群における各変数の変化量、統制群における事後測定値から事前測定値を差引いた値を統制群における各変数の変化量とし、各変数に関して実験群の変化量と統制群の変化量を比較することによって、エイズキャンペーンの効果を判定する。実験群（参加群）と統制群（不参加群）の36変数の変化量の平均と標準偏差、および t 検定の結果を Table 2 に示した。表内の変数の配列順序は、質問紙における測定順である。

Table 2 変化量（事後得点－事前得点）の群間比較（ t 検定）

	参加群 ($n=65$)		不参加群 ($n=27$)		t 検定	
	M	SD	M	SD	t 値	df
エイズに対する恐怖感情	-0.45	0.94	-0.37	0.79	-0.37	90
エイズに対する恥感情	0.09	0.76	0.04	0.59	0.34	90
PWH/Aへの共感感情	0.12	0.94	-0.04	0.92	0.74	89
深刻さ認知（社会的被害）	-0.34	0.78	-0.19	0.79	-0.86	90
深刻さ認知（身体的被害）	-0.23	0.93	0.07	1.04	-1.38	90
生起確率認知（日本）	-0.05	0.74	-0.04	0.77	-0.04	89
生起確率認知（自分自身）	0.26	0.99	0.07	0.73	1.01	65.32
PWH/Aに対する態度①	0.29	0.95	0.00	0.68	1.66	67.17
PWH/Aに対する態度②	0.37	0.76	0.19	0.48	1.39	74.93
PWH/Aに対する態度③	0.08	0.78	0.22	0.42	-0.92	90
PWH/Aに対する態度④	0.08	0.37	-0.11	0.42	2.14	90
コンドーム効果性認知	0.14	0.46	-0.07	0.73	1.68	90
コンドームコスト認知	-0.28	0.88	0.04	0.94	-1.53	90
コンドーム自己効力（実行能力）認知	-0.03	0.43	0.16	0.85	-1.07	28.89
コンドーム報酬認知	0.08	0.85	0.15	0.95	-0.35	90
コンドーム実行者割合認知	-0.02	0.65	-0.22	0.58	1.44	90
コンドーム責任認知	0.00	0.59	0.07	0.73	-0.51	90
コンドーム規範認知	0.45	0.77	-0.07	0.68	3.22	55.23
コンドーム行動意思	-0.05	0.57	-0.11	0.42	0.53	90
検査効果性認知	-0.02	0.28	-0.04	0.59	0.18	31.00
検査コスト認知	-0.13	0.65	0.15	0.82	-1.69	89
検査自己効力（実行能力）認知	0.08	0.76	0.07	0.78	0.02	90
検査報酬認知	0.26	1.08	0.19	1.21	0.30	90
検査実行者割合認知	0.26	0.80	0.37	0.74	-0.61	90
検査責任認知	0.43	0.77	0.11	0.70	1.86	90
検査規範認知	0.46	0.90	0.33	0.73	0.65	90
検査行動意思	0.46	0.81	0.37	0.74	0.50	90
共生行動責任認知	0.35	0.65	0.00	0.55	2.65	56.45
共生行動コスト認知	-0.29	0.84	-0.04	0.71	-1.38	90
共生行動報酬認知	0.22	0.84	-0.19	0.92	2.03	90
共生行動実行能力認知	0.09	0.70	-0.04	0.59	0.84	90
共生行動意思	0.28	0.57	-0.11	0.64	2.86	90
エイズ問題関心	0.29	0.55	0.07	0.55	1.73	90
健康問題関心	0.02	0.62	-0.19	0.74	1.24	42.37
学習意欲	0.23	0.58	-0.04	0.71	1.89	90
成績に対するこだわり	0.17	0.63	-0.04	0.76	1.35	90

注1 *** $p<.01$ ** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

①防護動機理論、集会的防護動機モデル、共生行動生起過程モデルに共通の変数 HIV 感染の深刻さ認知 2 変数（社会的被害認知、身体的被害認知）、HIV 感染の生起確率認知 2 変数（日本での感染拡大認知、自分自身への感染可能性認知）の 4 変数いずれに関しても、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られず、エイズキャンペーンの効果は認められなかった。

②防護動機理論と集会的防護動機モデルに共通のコンドーム関連変数 コンドーム使用の効果性認知、コンドーム使用のコスト認知、コンドーム使用の自己効力認知あるいは実行能力認知、コンドーム使用行動意思の 4 変数いずれに関しても、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られず、エイズキャンペーンの効果は認められなかった。

③防護動機理論と集会的防護動機モデルに共通の HIV 抗体検査関連変数 HIV 抗体検査受検の効果性認知、HIV 抗体検査受検のコスト認知、HIV 抗体検査受検の自己効力認知あるいは実行能力認知、HIV 抗体検査受検行動意思の 4 変数いずれに関しても、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られず、エイズキャンペーンの効果は認められなかった。

④防護動機理論に固有のコンドーム関連変数 コンドーム不使用の報酬認知に関して、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られなかった。

⑤防護動機理論に固有の HIV 抗体検査関連変数 HIV 抗体検査非受検の報酬認知に関して、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られなかった。

⑥集会的防護動機モデルに固有のコンドーム関連変数 コンドーム使用の実行者割合認知、コンドーム使用の責任認知、コンドーム使用の規範認知の 3 変数のうち、コンドーム使用の規範認知に関する正の方向への変化量は、統制群よりも実験群の方が有意に高かった。エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、コンドーム使用の規範認知を高める方向に変化させていることが分かった。そのほかの 2 変数に関しては、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られなかった。

⑦集会的防護動機モデルに固有の HIV 抗体検査関連変数 HIV 抗体検査受検の実行者割合認知、HIV 抗体検査受検の責任認知、HIV 抗体検査受検の規範認知の 3 変数いずれに関しても、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られず、エイズキャンペーンの効果は認められなかった。

⑧共生行動生起過程モデルに固有の変数 エイズに対する恐怖感情、PWH/A に対する共感感情、共生行動実行の責任認知、共生行動実行のコスト認知、共生行動実行の報酬認知、共生行動の実行能力認知、共生行動意思、PWH/A に対する態度（4 変数）の 11 変数のうち 4 変数で、実験群と統制群の変化量の間に有意差が見られた。すなわち、統制群に比べて実験群の共生行動実行のコスト認知は、有意な負の方向への変化量を示しており、エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、PWH/A との共生行動のコストを小さく認知するようになった。また、統制群に比べて実験群の共生行動実行の報酬認知は、有意な正の方向への変化量を示しており、エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、PWH/A との共生行動の報酬を大きく認知するようになった。さらに、統制群に比べて実験群の PWH/A との共生行動意思は、有意な正の方向への変化量を示しており、エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、PWH/A との共生行動意思をより強めるようになった。加えて、統制群に比べて実験群の PWH/A に対する態度の一部（PWH/A への

偏見・差別を否定する態度）は、有意な正の方向への変化量を示しており、エイズキャンペーンに参加した者は、不参加の者に比べ、PWH/A に対する態度の一部をより肯定的な方向へと変容させた。

⑨その他 エイズ問題への関心、健康問題への関心、学習意欲、成績に対するこだわりの 4 変数に関して、実験群と統制群の変化量の間に有意差は見られなかった。

考 察

以上のように、実験群の変化量と統制群の変化量の間に有意差が見られた変数は、36 変数中 5 変数であった。エイズキャンペーンに参加した実験群は、不参加の統制群に比べ、コンドーム使用の規範認知を増加させ、PWH/A との共生行動のコスト認知を減少させ、PWH/A との共生行動の報酬認知を増加させ、PWH/A との共生行動意思を強め、一部の指標であるものの PWH/A に対する態度（PWH/A への偏見・差別を否定する態度）を肯定的な方向へと変化させた。

なお、有意差までには至らなかったが、傾向差 ($p < .10$) を示した変数が 36 変数中 4 変数見られたので、参考までに説明しておきたい。統制群に比べ実験群の方が、コンドーム使用の効果性認知は正の方向への変化量が大きい傾向にあり、HIV 抗体検査受検の効果性認知は負の方向への変化量が小さい傾向にあり、HIV 抗体検査受検の責任認知は正の方向への変化量が大きい傾向にあり、学習意欲を増加させる傾向のあることが判明した。

本研究で取り上げたエイズキャンペーンは、HIV 感染予防に対しては目立った効果を生じさせないが、PWH/A との共生に対してはある程度の効果をもつことが証明された。すなわち、今回のエイズキャンペーンに参加することによって、PWH/A との共生行動に伴う報酬は大きい、コストは小さいという方向に参加者の認知が変化し、最終的に PWH/A に対する参加者の態度が肯定的な方向に変化し、PWH/A との参加者の共生行動意思が強化された。また、あまり明瞭ではないが、エイズキャンペーンへの参加は、コンドーム使用の効果性認知、(相対的に) HIV 抗体検査受検の効果性認知、HIV 抗体検査受検の責任認知を高める傾向のあることが分かった。

本研究では、統制群法を用いた事前事後測定計画に基づく実験計画を採用した。こうした研究の性格を生かして、エイズキャンペーン参加前後の測定値の差から変化量を算出し、この変化量に関する実験群（参加群）と統制群（不参加群）の差を分析することによって、エイズキャンペーンの効果を判定した。しかし、本研究の測定変数は、防護動機理論、集散的防護動機モデル、共生行動生起過程モデルという 3 つの理論・モデルを念頭に置きながら設定したので、これらの理論・モデルに沿った分析が可能である。深田・木村（2000）や深田他（2007b）が行ったように、各理論・モデルの説明力（ R^2 ）およびそのモデルで仮定される規定因の影響力（ β ）を実験群と統制群で比較検討することで、理論・モデルの枠組みを利用したエイズキャンペーン効果の判定を試みる方法もあるだろう。

木原・木原（2009）は、従来の行動変容理論・モデルをエイズ予防に応用した研究は、個人や小グループを対象とした短期的直後効果のみによって検証される傾向があり、理論と実践の乖離が生じることを指摘している。そのため、今後は、個人、家族、仲間、ネットワーク、学校や職場、社

会全体といった様々なレベルからアプローチを可能とするマルチレベルの行動変容戦略も視野に入れつつ、従来の行動変容理論の枠組みを用いる場合であっても、実践的なフィールド研究の事例を蓄積し、個人、集団から社会までのマルチレベルを考慮した研究を行っていく必要があるだろう。

引用文献

- Devos-Comby, L., & Salovey, P. (2002). Applying persuasion strategies to alter HIV-relevant thoughts and behavior. *Review of General Psychology*, **6**, 287-304.
- Freimuth, V. S., Hammond, S. L., Edgar, T., & Monahan, J. L. (1990). Reaching those at risk: A content-analytic study of エイズ PSAs. *Communication Research*, **17**, 775-791.
- 深田博己・木村堅一 (2000). エイズ予防行動意思に及ぼす恐怖－脅威アピールの効果－ビデオ教材の効果分析－ 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 492-493.
- 深田博己・高本雪子・深田成子 (2007a). AIDS 教育用印刷教材の効果(1) 広島大学心理学研究, **7**, 273-289.
- 深田博己・高本雪子・深田成子 (2007b). AIDS 教育用印刷教材の効果(2) 広島大学心理学研究, **7**, 291-310.
- 深田博己・戸塚唯氏 (2001). 環境配慮行動意思を改善する説得技法の開発 未公刊資料
- 木原正博・木原雅子 (2009). エイズと行動変容戦略－その現状と課題 保健医療科学, **58**, 26-32.
- 木村堅一 (1995). エイズ予防行動意志に及ぼす脅威の大きさ、対処行動の効果性及びコストの効果－脅威アピールにおける修正防護動機理論の検討－ 広島大学教育学部紀要 第一部（心理学）, **44**, 59-66.
- 木村堅一 (1999a). 説得に及ぼす脅威アピールの効果－防護動機理論からの検討－ 実験社会心理学研究, **39**, 135-149.
- 木村堅一 (1999b). エイズ教育に効果的な視聴覚教材の開発に関する基礎研究（1）－防護動機理論からの視聴覚教材の内容分析－ 中国四国心理学会論文集, **32**, 114.
- 木村堅一 (2000). エイズ教育に効果的な視聴覚教材の開発に関する基礎研究（2）－視聴覚教材の効果分析－ 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 494-495.
- 木村堅一 (2002). 脅威認知・対処認知と説得：防護動機理論 深田博己（編著）説得心理学ハンドブック－説得コミュニケーション研究の最前線－ 北大路書房 pp.374-417.
- 木村堅一・深田博己 (1995). エイズ患者・HIV 感染者に対する偏見に及ぼす恐怖－脅威アピールのネガティブな効果 広島大学教育学部紀要 第一部（心理学）, **44**, 67-74.
- 村瀬幸浩 (1994). 教育実践への指標・エイズ ぱすてる書房
- Rogers, R. W. (1983). Cognitive and physiological processes in fear appeals and attitude change: A revised theory of protection motivation. In J. T. Cacioppo & R.E. Petty (Eds.), *Social psychophysiology: A sourcebook*. New York: Guilford Press. pp.153-176.
- Salovey, P., Rothman, A. J., & Rodin, J. (1998). Health psychology. In D. T. Gilbert & S. T. Fiske (Eds.),

Handbook of social psychology. 4th ed. Vol. 2. Boston: McGraw-Hill. pp. 633-683.

Sherman, D. A. K., Nelson, L. D., & Steele, C. M. (2000). Do messages about health risks threaten the self? Increasing the acceptance of threatening health messages via self-affirmation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 1046-1058.

高本雪子 (2006). HIV 対処行動意思に及ぼす AIDS 教育の影響過程—防護動機理論と集合的防護動機モデルに基づく分析— 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), **55**, 267-276.

高本雪子・深田博己 (2006). HIV 感染への不適応的対処に及ぼす AIDS 教育の効果—防護動機理論と集合的防護動機モデルに基づく分析— 広島大学心理学研究, **6**, 57-69.

高本雪子・深田博己 (2008). HIV 対処行動意思と HIV 感染者・AIDS 患者への態度に及ぼす AIDS 情報の効果 対人社会心理学研究, **8**, 23-34.

高本雪子・深田博己 (2010a). エイズ説得に必要な情報の特定とその影響メカニズムの解明 (1): HIV 感染者・エイズ患者との共生行動意図に及ぼすエイズ情報の影響過程 説得交渉学研究, **2**, 11-27.

高本雪子・深田博己 (2010b). エイズ説得に必要な情報の特定とその影響メカニズムの解明 (2): HIV 対処行動意図に及ぼすエイズ情報の影響過程 説得交渉学研究, **2**, 57-72.

戸塚唯氏 (2002). 環境問題に対する集合的対処行動意図の規定因 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), **51**, 229-238.

A field study on the effect of an AIDS educational campaign

Kenichi KIMURA (Meio University)

and

Hiromi FUKADA (Hiroshima Bunkyo Women's University)

The purpose of this study was an examination of the effect of a particular AIDS educational campaign in Okinawa, on improving of participant's awareness about HIV prevention and on increasing their intention of symbiosis (coexistence) with a person with HIV or AIDS (PWH/A) . Ninety-two Japanese college students were divided into either a campaign-participation group or a non-participation group. Both before and after the campaign, all the students were asked to answer the same questionnaire concerning HIV prevention and symbiosis with PWH/A. Compared with the non-participation group, the participation group showed increased awareness of condom norms, and both increased intention to interact with PWH/A as well as the possible rewards of such interaction. The participation group also showed a reduced perception of the costs involved in symbiosis with PWH/A compared with the non-participation group. The result of this study suggests that although AIDS educational campaign in Okinawan did not have a noticeable effect on HIV prevention behavior, it had a special effect on the expected symbiosis with PWH/A.

Key words: AIDS education, prevention, symbiosis, field study.